

イヌの椎間板ヘルニアの再発に関する検討

○西田英高、田中 宏、北村雅彦、栗山麻奈美、越智すなお、大橋美里、林 聡恵、
前田賢一、中山正成
中山獣医科病院・奈良県

【はじめに】

イヌの椎間板ヘルニアは椎間板物質が脊柱管内へ突出あるいは逸脱する病態で、これによって脊髄が障害を受ける。ミニチュアダックスフントなどの軟骨異栄養性犬種でその発生を多く認め、これらの中には再発を繰り返す症例も存在する。しかし、イヌの椎間板ヘルニアの再発における報告は少なく、その詳細については不明な点が多い。今回、椎間板ヘルニアと診断したイヌの再発の特徴について、検討した。

【材料および方法】

2007年6月から2009年5月に本院に来院し、外科的手術を行い、椎間板ヘルニアと診断したイヌの346例を対象とした。単純レントゲン検査、CT検査、脊髄造影検査によって病変部を確認し、外科手術によって脊髄の減圧および逸脱した椎間板物質を除去した。術後、機能が改善した後に、神経学的検査によって悪化が認められたものを再発とした。

再発群と再発が認められなかった群に分け、犬種、性別、年齢、および体重について検討した。また、発症部位および再発までの期間についても検討した。さらに、単純レントゲン検査において第1頸椎から仙骨までの石灰化した椎間数を記録し、石灰化した椎間板と再発の関連性について検討した。

【結果】

346例の犬種別内訳はミニチュアダックスフント294例と最も多く、次いでウェルシュコーギー6例、シーズー6例、雑種6例、アメリカンコッカースパニエル5例、ビーグル5例と続いた。再発が確認されたのは、346例中60例(17.3%)であった。ミニチュアダックスフントの再発率は294例中54例(18.4%)、その他の犬種の再発率は52例中6例(11.5%)で、これらに有意差は認められなかった。雄は211例中45例(21.3%)、雌は135例中15例(11.1%)で再発を確認した。未去勢雄は168例中40例(23.8%)、去勢済雄は43例中5例(11.6%)、未避妊雌は93例中9例(9.7%)、避妊済雌は42例中6例(14.3%)で再発を確認した。雄は雌に比べて再発率が有意に高くなり、未去勢雄は去勢済雄に比べて再発率が高い傾向が認められた。初発時の年齢、体重に有意な差は認められなかった。

発症部位は初発、および再発ともに胸腰部に多く認められた。再発までの期間は、発症後3日から3年8ヶ月と症例によって様々であった。再発時に手術によって発症部位を確認できたのは60例中47例であり、53部位であった。再発時に前回と同部位での発症は8部位(15.1%)、過去の発症部位のとなりの椎間板での発症は19部位(35.8%)、それ以外の部位での発症は26部位(49.1%)であった。術後2週間以内の早期に再発した6例全てが過去の椎間板ヘルニアと同部位での発症であった。また、これら全てにおいて、初発時に発症部位での椎間板の石灰化がレントゲンで確認された(図1, 2)。

次に、第1頸椎から仙骨までの石灰化した椎間板数を確認したところ、再発群の石灰化した椎間板数は再発しない群と比較して、有意に高くなった。さらに石灰化した椎間板数が4ヶ所以下の場合、再発率は16.5%であったが、5ヶ所以上の場合、再発率は48.1%となり、有意に高い再発率となった。

【考察】

本研究において、イヌの椎間板ヘルニアの再発率は17.3%であった。一方、過去の報告においては、雄5.4

～26.5%と研究によって様々であった。これらの違いは、症例数、犬種の割合、および術式などの要因によって、左右されると考えられた。また、雄が雌と比較して、再発率が高いことが示唆された。一方、海外の文献において、性差は認められなかったとの報告がある。これらの違いには不妊の実施率が海外の報告に比べて、日本では低いことが影響していると考えられた。さらに、エストロゲンには椎間板の変性を抑制する効果があるという報告があることから、雄の椎間板は雌に比べて変性が起きやすく、再発しやすいことが考えられた。

術後 2 週間以内の早期に再発した全ての症例は、前回と同部位での発症であった。また、これら全ての症例で、初発時に椎間板の石灰化が認められたことから、石灰化した椎間板でのヘルニアは短期間で同部位に再発する可能性があると考えられた。さらに石灰化した椎間板が 5 ヶ所以上と多数認められた場合、再発率が高いことが示唆された。造窓術が再発予防に効果的であるとの報告がある一方、造窓術が脊椎の不安定化を起こすとの報告もある。以上のことから、全ての症例に対して予防的治療を行うのではなく、再発する可能性の高い症例に対して、できるだけ負担の少ない予防策を考慮する必要がある。

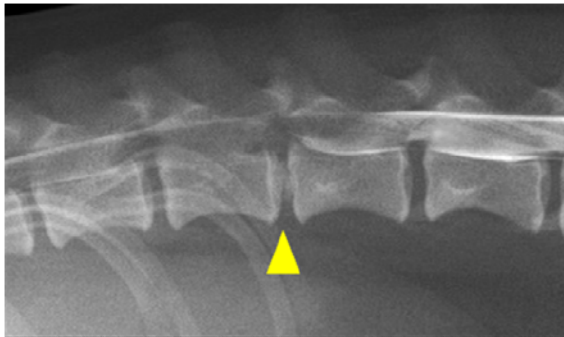


図1 初発時のヘルニア部位に椎間板の石灰化が認められた脊椎造影後のレントゲン側面像

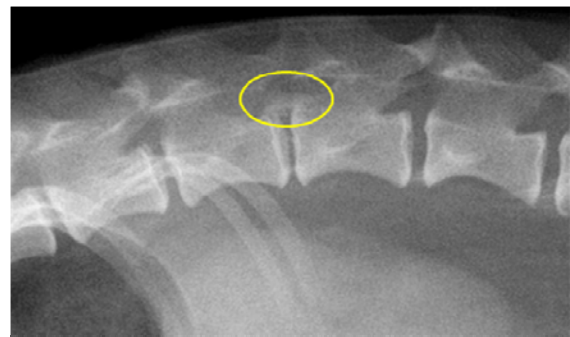


図2 術後 2 週間後に石灰化した椎間板が再度脊柱管内に逸脱したレントゲン側面像 (図1と同じ症例)